

マイスターのささやき「レンタカーで巡る 世界遺産！」

大阪府豊中市 世界遺産マイスター 森瀬 英司

◇第3話 「コトル地方の歴史的建造物と自然」(モンテネグロ)

“ヨーロッパの火薬庫”と呼ばれていたバルカン半島。旧ユーゴスラビア共和国が崩壊してから幾多の戦禍を経て、現在は、アルバニア共和国を加えた8カ国に分かれています。かつてウィーンから車を借り出しバルカン諸国を周遊した時、スロベニア共和国とクロアチア共和国の2カ国以外では内戦の余波が続いており、入国できない状況だったと記憶しています。

あれから10年。中欧より帰路の途中、バルカン諸国の中でも、ドゥブロヴニクと並んで美しいとされる、モンテネグロ共和国のコトルが気に入り、時間を割いて訪れることにしました。季節は初夏の6月下旬。財政問題で揺れるギリシア共和国のアテネを未明に飛び立ったセルビア航空機は、ベオグラード経由で、モンテネグロの首都、ポドゴリツァ空港に、早朝、到着しました。

海外でレンタカーを借りるとなると、その国の交通事情がやはり懸念されます。マイナーな国になればなるほどです。できるだけ少しでも早く情報を知りたいと思い、着陸直前の機内から目を凝らして、その街の様子、特に道路の様子を観察します。米国ならば巨大なハイウェイを走る車の多さに驚き、イタリアならば狭い道の渋滞に不安を覚えたので、予備知識を得ようと頑張ります。しかし、ポドゴリツァ空港周辺には、家がぼつぼつ、道路もがらがら。この国には自動車があるのかと、かえって心配になる交通量の少なさでした。空港ターミナルはコンパクトで新しい建物ですが、一步外に出ると、何もありません。駐車場に停まっている車もちらほらで、タクシーすら、なかなか見当たりません……。首都空港にしては、寂しい限りです。レンタカー会社も本当にあるのかと心配しましたが、到着ロビーを出ると、事前予約したレンタカー会社のブースがすぐに見つかり、ホッとしました。手続きは簡単で、意外にもGPSが準備されていました。ところが、ガソリンは半分しか入っていません。ヨルダンでもそうでしたが(第2話参照)、“満タン貸し”は決してグローバル・スタンダードではないようです。

首都ポドゴリツァは、第二次大戦後に再建された街で、並木道は美しく、道路も碁盤の目でわかりやすいのですが、建物は、社会主義時代を象徴しているかのように、どれもよく似ていて、外見は良いものの、裏手に回ると全く整備されていません。暗い従前時代を感じざるを得ませんでした。コトルもこのような雰囲気だろうか……と、期待感が少し薄れながらも、GPSの目的地をコトルにセットし、出発です。

ポドゴリツァの街を出ると、整備された平坦な道が続き、長閑な田園風景に囲まれました。しばらくして山岳道に入り、くねくね40分ほど走行。突然、真っ青な海が視界に飛び込んできました。アドリア海です。ポドゴリツァとは180度違った、気持ちが明るくなる風景で、先程までの心配は杞憂に終わりました。

海を左手に見ながら、アップダウンを繰り返す道を走り、スヴェティ・ステファン島が見えるところで休憩。赤い屋根が青いアドリア海に映える美しい島で、まるで小さなドゥブロヴニクを思わせます。今は島全体がホテルになっているそうです。



さらにリゾートタウンのブドヴァを過ぎて北上し、山から入り江に飛び込むような急坂を下ると、コトルの旧市街前に到着しました。目の前の埠頭にはサントリーニ島で見かけるような大型観光クルーズ船が停泊していて、やはりここは世界有数の観光地なのだと実感しました。予約していたホテルが城壁に囲まれた旧市街の中にあつたため、車をいったん城壁外の駐車場に停めて、歩きにくい石畳の道を、荷物を引っ張りながら、てくてく歩いていきます。城壁の前は、埠頭を行き交う人たちやカフェで寛ぐ人たち、城壁沿いの市場で買い物を楽しむ人たちなど、大勢の観光客で賑やかです。城壁をくぐると、そこは何世紀も時計の針を戻したような、美しい中世の街並みが広がりました。人がすれ違うのがやっとの、狭い路地です。もちろん車は走っていません。大小の教会や、教会前広場に店を構える、カフェやレストラン。アドリア海特有の明るさと宗教色に彩られた歴史の重みを感じさせる街です。

コトル旧市街は、アドリア海に面したコトル湾の最奥部に位置し、深い入り江と背後に聳える標高 1,800m のロヴツェン山の天然要塞に囲まれ、紀元前から貿易で栄えた要塞商業都市です。また、ローマ・カトリックと東方正教会の境界にあたり、旧市街には双方の教会が混在し、多種多様な建築様式が見られます。15 世紀にはヴェネツィア共和国の支配下に置かれた影響か、アドリア海沿岸の他の都市国家に、どこか趣が似ている感じがします。1979 年 4 月 15 日に発生した大地震で、世界遺産登録と同時に、世界で初めての危機遺産にも登録されましたが、今では素晴らしい復興を遂げています。

ここのビューポイントは、何とんでも、城壁を上った高所にあります。ロヴツェン山沿いに築かれた城壁を歩くには、およそ 40 分間かかると、インフォメーション・デスクで案内され、石畳の階段に難渋しながら、歩みを進めました。高度が上がるにつれて、コトル湾に旧市街、はたまた、遙か遠くリアス式海岸の入り江までもが見渡せるようになり、その美しさに自然と元気が湧き出てきます。

途中の小さな教会前で、日がな一日ペットボトル水を売る、人懐っこいおじさんと出遭いました。話を聴いてみると、笑顔で「売れ行きはまあまあ……」。よく売れている様子です。一方で、商売とはいえ、よくここまでこれほどの大量の水を担ぎ上げてきたものだと、感心しました。

ようやく頂上に到着です。心地良い風が頬を撫でてくれました。
眼下には、美しいオレンジ色の葺が波打つ旧市街の街並みと
真白い大型観光船が停泊するコトル湾。
視線を上げれば、深く刻まれた真っ青な入り江が、
遙か遠くまで眺望できます。
“疲れが吹っ飛ぶ”景色とは、まさにこのこと。
ポドゴリツアの暗い印象も重なると、
この美しい中世の街並みと大自然に、感動もひとしおです。



ただし、ロヴツェン山の頂上付近には、過去の大地震の痕跡として、無残にも崩れた城壁や階段が、
廃墟のように残されています。早々に再建・整備され、元の美しい姿に戻ることを祈りながら、山を下りました。



夜になると、旧市街はライトアップされ、教会前や広場では食事に
繰り出した観光客で、活気に満たされます。メテオラで知り合った
日本人の方と偶然にも再会し、お互い一人旅ということもあって、
一緒に食事をすることにしました。オープンテラスのレストランで、
モンテネグロ産のワインと名物の魚介料理に舌鼓を打ちながら、
お互いの道中話で盛り上がりました。隣席のうるさいほど賑やかな
イタリア人たちとの、わけのわからない話にも会話が弾みます。
旅の醍醐味です。わいわい、がやがや……中世の情景に酔いしれながら、
夜は更けていきました。

(第4話に続く……)

☆小さなささやき (余談)

10年前当時、レンタカー会社の保険などの問題があり、事前に入国申告をしていましたが、
バルカン諸国では、スロベニアとクロアチア以外は、どんな事情があれ、
レンタカーでの入国は認められていませんでした。

アドリア海沿いの陸路でドゥブロヴニクへ行くには、途中どうしても、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを
通過せねばなりません。まあ 20km 程度だからいいだろう……と思っていたところ、
ボスニアの入国審査官は、しきりにパスポートを指差し、クレームをつけてきました。
意外にも、車のことではなく、VISA が必要だということです。

「日本人なら、必要ないはずだ！」と強硬に言い張り、なんとか通過できましたが、
あとで調べ直してみたら、当時は VISA が本当に必要だったようです…… (笑)。
何も知らないということは、強いものですね。